

大森高原物語

藤井芳金

目次

1. 大森高原の地図	1 頁
2. 芸藩通史之謡	2 頁
3. 地名に何故伏がつくのか	3 頁
4. 大森神社の神々	4 頁
5. 平安鎌倉時代	6 頁
6. 戦国時代毛利進出	7 頁
7. 福島正則之検地帳	9 頁
8. 大塚氏の古文書	
9. 郷の話	
1. 大森高原の地図	

- ・ 阿弥陀が峰と寒山の間に北谷、郷、大畑の三部落あり、大森とはその三部落を言う。
- ・ 明治以前は伏谷下村、伏谷上村と言っていた。
- ・ 池の草に蛇の池ありて、蛇退治の昔話あり。
- ・ 阿弥陀が峰は極楽山とも言いて観音堂在りしところ。
- ・ 大通寺は毛利元就の建立せしもので大鏡はその時寄進せしもの。
安古市武田氏長楽寺の奥の院で奥の長楽寺といった。
- ・ 大森神社の神舞（神楽）の言い立ては遠く千年の昔のもので完全に近い姿で残存している。竜のご神体出現。

2. 地名考・芸藩通史（文政二年）

古謡：安芸の国では出相の清水、さぎの森、阿弥陀が峰に厳島山。

安芸の国では名所が四箇所あって、謡に歌われていたと言うのである。

厳島山とは弥山のことである。弥山とならんで謡に歌われた阿弥陀が峰は大森の西にある阿弥陀が峰である。夕日が西に沈む時、阿弥陀仏に見え、西方浄土を思わせるからである。それ故に極楽山ともいっている。山の端に観音堂があり大日如来の古い像は今に残っている。

阿弥陀が峰を尚西に進むと大峰山がある。大和吉野の大峰山は有名な役の行者の修験道場である。その名にふさわしい安芸の大峰である。

池の草の蛇の池は観音山の蛇の池と通じ蛇が行ったりきたりしていたと信じられていた。田村氏の蛇の話も根拠はその辺にある。

重光神社はスサノオの命を祭ってある宮である。有名であった理由は、山伏の道場であって大衆が山登りをして、遠見して楽しんだ所であったのであろう。

さぎの森とは現在の大森で佐伯の音が訛ったものである。土地の伝説ではまだまだ大きな広い森であったという。出相の清水とは人々が出会う温泉であるから、湯の山か

下伏の鍋石であったであろう。

一ページの地図に見るように伏のつく土地柄である。伏谷、上伏谷、下伏谷、子伏原がそれ。阿弥陀が峰、大峰山、蛇の池（僧坊の有った所）極楽山の名のあるところから山伏修験道場と見るべきである。それを実証するものに大森神楽がある。神楽の言立てを見ると山伏舞であって、役行者の教えを説いて諸国を巡ることがよくわかる。すなわち鬼と竜の舞である。舞振りも他と異なる。

所望分の舞

東	青竜王大神	春の神
南	赤竜王大神	夏の神
西	白竜王大神	秋の神
北	黒竜王大神	冬の神
中	黄竜王大神	季節と季節の間の神（土用）

自然界の方角、季節に現れ給う五色の色彩は竜の表現だというのである。竜は水でもある。天に昇り地に下る水気でもあるのだ。その偉大なる現象を称えるその喜びの舞が山伏の神楽舞であった。歌一、二

- ・ 春駒や勇めば勇め跳ねば跳ね跳ねる野路に光の咲き満つ
- ・ 冬来れば誰かに告げんうす氷時雨はいつか白雪の花

皆こんな調子である。竜王石、大森の沼より出づ。

山岳修行が流行した時は、平城、平安の時代であったろう。森の周囲は沼地であった。蛇は山に千年沼に千年の諺がある。寛政九年八月、岷山の都志見往来日記の大森記の中に次の語りがあある。

「先年巖島大鳥居の木をこの森にて七本伐るといえり。この森より東に当たりて、少し小高いところに森あり。これは大森の山の神を祭る。其の祭は三年に一度九月二十六日に祭礼あり。わらをもって大いなる竜の頭を作り桂の木に縛り云々。（桂の木を胴にして舞を舞ったのであろう。）」

約二百年前の話。今は北谷部落の小社となっている大判さんの事である。山の神とは大山津見の神で大三島の神と同じである。なんにしても竜でお祭をしていたことが記録されている。蛇の池の竜、神楽の竜。沼から竜のご神体が出てきても不思議は無いのである。

大森神社の祭神は

タラシナカツヒヲ神-----仲哀天皇
ホンダワケノ神-----応神天皇
オオナガシヒメノ神-----神功皇后

神功皇后（ジングウコウゴウ）とは卑弥呼（日御子）のことであって日本に斉き祀つてある神である。この八幡は峠神を祭った。太古に遡ることが出来る又次第に祭神が増えていったことであらう。私の来た四十年前には「春日大明神」「天照皇大神宮」

「八幡大菩薩」の額が有り、字も読めていた。今は額だけが残っている。

石灯籠は宝暦年間、野村が庄屋であった時代、神殿を建立した時の物である。峠の神は今は神殿に鎮まっておられる。

役の行者は山岳修行山伏、山伏舞の元祖だから古文書の一部を記してみよう。

「人王四十二代文武天皇の御世大長八年巳亥 役の優婆塞（ウバソク）葛城山に久米の岩橋かけるとて諸神に呪を寄せ、一夜のうちに渡すべしと約束すと申せし。橋渡しえず夜明ければ、行者を怒り、諸神腹立てん奏申されければ御逆鱗有りて流刑に処せられる。」この事件で大三島行きのことが書いてある。山の神と関係が有りそうである。イナムラケ城、鞍馬山、熊野大明神の地名が言い立ての中に出てくる。役の子角に關係のある所から、山伏と地名の伏は深い關係がある。

1. 平安時代の政治

藤原氏、佐伯氏（厳島神社神主）速谷神社を中心にした豪族の支配下にあった。次の文章は凡氏の問題がある。

「貞観元年四月(859 年)凡直貞刀自（オオシノナヲシサダトジ）安芸の国を貫す」の文章がある。多祁理宮（タケリノミヤ）記にある、多しと読む、大（オオシ）がともに政治關係にあった。大田川、大竹、大野、大内、オオ、凡（オオシ）に關係があることがわかる。大森、大畑、大塚等其の時代の名残と思われる。

2. 鎌倉時代

宮島を祭神とした平家は二十年間で滅びた。源氏の鎌倉時代が来た。安古市、三入（ミイリ）、壬生に地頭、守護を置くことになった。安には武田信光がやってきた。承久の乱後いよいよ陣を強めた。信宗は銀山城を築いたと言う。（次頁の系図を参照されたい）長楽寺を氏寺とし、七堂伽藍を建立されたのである。滅びるまで約四百年の居城であった。特に關係のあったのが砂谷であった。

長楽寺の奥の院が極楽山長楽寺である。山伏は武田氏の援護を受け諸国を回ることになったのであろう。菩提寺の名を大森に持って来るほど武田氏にとっては重要な地点であったのである。

戦国時代政治。毛利元就、吉川元春天文二十三年六月の戦い。

陶晴賢は大田、吉和、山里の土民二千を扇動し戦わす。毛利吉川は七月中旬水内に進出、吉和、山里一揆は掃討された。

玖島、白砂、津田、友田、浅原を追いながら折敷畑の決戦となり、周年厳島決戦となり、晴賢はついに滅びた。その後山の里の者は十年間も反抗を続けたという。それ程白砂の里は要害な地であった。武田氏から受けた恩を忘れなかったからでもあろう。白砂村は要害な地で重光口から攻める以外に道は無い。白砂の語源は城迫であろうし、迫とは谷の里の意味である。毛利吉川は手を焼いた。そこで玖島の小田家に千代田町有田城主から婿にやり、吉川と縁を結んだ大森は武田氏の奥の院長楽寺を帖から落とし大通寺を持ってきた。大通寺は元就の菩提寺で、吉田で元就が死去したとき大通

院において葬儀をした。大森大通寺はそれ故に西の院といったのである。かくて大鐘を寄進し、山の里の者を鎮めたのである。因みに鐘は京都で造り室町時代の名がある。長楽寺本尊大日如来は今大通寺には無い。地御前の寺まで行っておられる。

石見の国轟城主が大通寺の僧になったと思われるがこれも今は昔語りとなっている。江戸時代 中国百余万石の大將、時の流れには抗する事も出来ず、慶長五年両家とも山口県に移転、その後福島正則が安芸国の城主となる。正則は豊臣秀吉の七本槍の一人であった。関が原合戦には徳川方についた。豊臣家は滅び広島を領知された。しかしわずか二十年にして滅び去った。その後浅野家が領主となり明治初年まで続くのである。次の頁に慶弔六年十一月正則伏谷上村御検地帖次第を示そう。

以上九頁からの検地書。文政二年の白砂村。文章は廿日市町史に記載されているもの。要害地白砂村の飛び地に観音山があったのである。

伏谷上村慶長六年検地帖。 福島正則が広島城に來た習年。1601年十一月昭和五十七年から見て381年前である。

381年前の上伏谷小伏原の様子を伺いみるによい材料である。特に田畠の地名が出ている。現在はなんと呼んでいるのであろうか。

*連仙坊郁=今は誰一人知っているものはいない。坊とは寺のことである。次に迫が出てくる。迫とは箕浦の事である。箕浦のところにあったのなら、今の権現堂(権現家が持っている堂)の事ではないだろうか。

*宮のまえ=大森の宮の前のことであろう。

*ふけ、小ふけ=森の周りは沼であったから、その近くの田ではないか。

*方角=にし、おき、中や、下の町。

*仏の本、ししあそび、くぼ、ふちのくぼ、くぼた、竹のくぼ、さるのおとかい、まるこのもと=以上のように面白い地名があり今では忘れられたのが多い。

*走り人あと=逃亡人、年貢が納められないので姿をくらました人の意。

*北谷、上わら=伏谷下村の中に、神前等飛び地が有った証拠である。

*特法=お坊さんの名。

*大うえ=藤左衛門は今の太上の事であろう。

*かちや=かちやのあった所であろうか。三郎かじがみえる

*風呂=ふろくぼ、ふろノ本、この頃村に一箇所くらい蒸しふろの出来た時代である。

*いおんぼう=坊、寺があったのであろう。

*びわ屋敷=琵琶法師の居た屋敷ではあるまいか。

*かいち=河内の事である。・西かいち・おきのかいち・いやのかいち・かいち・おきかいち・のちかいち・弥七かいち・やくろかいち・さかえかち・下のかいち・みにろかいち・ごのかいち・かちやかいち・太郎兵へかいち・あつちかいち・大かたかいち・上かいち・東かいち

河内は河のほitoriと言うほどのものであろうか。大畑川と小伏原川と合流するところがある。この川の恩恵を受けている田口のことを言ったのではあるまいか。

明治初年描かれた社寺の地図があるから 推測してみよう。

小伏原河内神社境内図 大塚家古文書

小伏原神社の名が河内である。昔から河内の神を祭っていたことが理解される。

神社名の起源は四百年以前からあったのである。

大畑 大田石神社の境内図

凡、多、大、太、すべてオオシと読む。太安麻呂と関係がある。

百照明と違う名 せんかう、特法、たけ、れうせん坊、乙（オト）、きうい（休意）

西野地帖落寺境内図（大通寺の前名長楽寺をいっている）

大通寺の昔慶長検地の時 たかなり 三畝二十三分--高一斗七升二合

たかなり 一畝 --高三升

屋敷 二畝二十八分—高四斗四升

権現堂 二畝 --高三斗

権現堂 一畝三分 --高一斗六升五合

五のカミ（郷ノ神）一畝二分--高一斗六升

連仙坊 十四分 --高七升

坊主寺野 一畝六分 --高三升六合

天文の終わり頃から長楽寺を改めて大通寺とした。それから約四十年の間毛利吉川の勢力下にあった戦国時代後半の状況である。かくて関が原天下分け目の戦いは毛利吉川は山口に移動。正則喜んで広島に入城。すぐ検地にかかった。其の有様が幸いに伏谷上には残っていた。正則はこの検地帳を調べ社寺の知領は取り上げてしまうのである。其の状態は知る由も無い。さて大森神社はどうであったか。大森神社境内が載っていないということは伏谷下村の所有であったと推考すべきである。

明治初期の記録は下伏谷西光寺境内図字楨原にあった。今の川角西光寺である。

大森八幡神社殿を建て替えしたときに庄屋は下伏の野村氏で宝暦の頃であった。慶長はそれ以前であるから下伏であったのであろう。検地帳は下伏にあったと見るべきである。八幡を八幡大菩薩と称えた時代から鎮座ましますものと見るべきである。

*免田=免田というのは年貢の要らない土地のことである。しかみ上田である。庄屋、寺、宮の役をする人に当てる田のことである。役得という言葉があるが子の事をいうのである。

*仏の本=道端に地藏さんなどもあったのであろう。

*おおはた、中おうはた、上大はた=今の大畑のことである。

*かみまえ=七石八斗四升、今の大野の神前の辺をいうのであろう。

*池の屋敷=二畝二十三分の屋敷はその頃大きいほうであった。庄屋でもやっておられた人が絶えて、屋敷が残っていたのであろう。

*三郎太郎河内=この頃亡くなっていた人の名であろう。

*わんいん原=三国八升もとれるところ。よいところである。その意味がわからない。

*ごのかたち=ご=郷である。五ノかえの免田であったのかも知れない。

*てらし、てらぶん=寺地であって、どの寺のか？免田であったことがあるのかもしれない。

*いおんぼう=廃寺の名であろう。

*寺ノ=寺の持ち主であったことがあったのか。

*おいおとし=兎や獣を追い詰めて捕ったのであろうか。

*ちゃ袋=お茶に関係があったのか、この火の見櫓のところだという。

*西の地=大通寺を西の院といていたからか、又は西側の地だからか。

以上長々と思ひ付きを述べた。この時代の変わり目、栄枯盛衰、いろいろのことがあったことであろう。

武田氏が滅びれば、そのときの中心人物は替わって毛利の代となる。轟氏はその一人であったであろう。四十年経てば又替えられて正則の信頼を受ける人物が中心に立つ。やれ良かったと思っているうちにわづか二十年で又交代する。そうして長く続いたようでも明治になれば新しい者と交代する。これが人の世の習いである。三百八十年前の分限者はだれであったりうか、ちょっと計算してみた。

伏谷上村は高合四百三十万石四斗二升八合六勺、土地三十九町五畝二十七歩、家数が七十六軒で一番田地を多く持っていた人は

源左衛門―二町六反八畝 家二軒

太郎右衛門―二町三反三畝 家二軒

彦五郎--二町三反三畝 家一軒

家一軒の広さ二畝余り、一番大きい家持は甚左衛門の三畝十八歩であった。

七十六軒の内半分以上が浮き世過ぎ（土地が無い）の家であった。

神左衛門は太夫であったのか、免田が二反二畝あったことがわかった。

山伏の山岳修行に最もふさわしいこの地に神舞の古い言立てが残っていた。武田氏の奥院であったり、山里が毛利に十年間も盾突いたり、はては毛利吉川の重臣が来たり、観音山は白砂の飛び地であったり、空飛ぶ竜神の物語をするのにふさわしいpp期名森があるなど、まだまだ面白い話が出るだろう。

郷 葛原郷に対し大森の郷は伏郷と言っている。大畑に大田石神社があるのに郷はどうであったろうか。「五のカミ」社は大通寺の上隣にある。これが村の名の出る前の郷の神社であったであろう。千年前の郷の名が今の郷部落である。郷の東の岡に八王神社がある。八王神社には薬師如来像の木像が共に斎き祭ってある。八王神とは次の八神で日本民族の祖神である。 記紀の一部を述べると

“かれここに天の安河を中におきて誓うとき、天照大御神先ず建速須佐之男命のかかせる十拳剣（トツカツルギ）をこいわたして、三段にうちおりヌナ音もゆらに天の真

名井に振りすすぎて、さがみにかみて吹き移る、気吹きやさぎりになりませる神の御名は、多紀理ひめノ命、市キ島ひめノ命

速須佐之男命、天照大神の左の御づらにまかせる八尺勾玉の五百津（イオツ）の珠をこいわたして、ぬなともゆうに、天の真名井にふりすぎで、さかみにかみて吹き移る気吹きやさぎりに成りませる神の御名は

正勝吾勝速日天之忍穗耳命（マサカツアカツカツハヤヒアメノオシホミミノミコト）

天之菩卑能命（アメノホヒノミコト）天津日子根命（アマツヒコネノミコト）

活津日子根命（カクツヒコネノミコト）熊野久須日比命（クマノクスビノミコト）以上八柱の神の宮が郷にある八王神社である。